

名前、ためらい、ナルシシズム

長田 陽一

：…もし扉が開くなら、それは私であり、沈黙であろう、私がどこにいるかわからない、私はそれを決して知ることとはないだろう、沈黙のなかにはわからない、続けるなくてはならない、私は続けることができない、私は続けるだろう。(『名づけえぬもの』サミュエル・ベケット)

1 フロイトの固有名

精神分析はフロイトの名なくして語ることはできない。これは、精神分析の特異性であり、また精神分析という出来事の特異性でもある。他の学問(科学)では、その創始者の名は知ってはいいても、彼らの文献を紐解いたり彼らの人となり調べることは——歴史的な面からみると重要であるが——その学問(科学)を学ぼうえではさほど重要ではないだろう。たとえば、物理学を学ぶためにガリレイやニュートンの原典にあたりたり、彼らの日記や手紙を研究しようとする人がどれくらいいるだろうか。

それになりたい精神分析は、いくつもの分裂や対立にもかかわらず、いまだにフロイトを参照し続けているし、フロイト

という人物への関心も、時代による変遷はあれ、衰えはしていないように思われる。それはあたかもフロイトのなかに、フロイトが書いた膨大な論文や書簡のなかに、精神分析のすべてがあり、フロイトを読み返すことで、これまで見過ごされ埋もれてきた知見が、そこで再発見されるかのようである。こうした精神分析の特異性は何に由来するのだろうか。フロイトに？ 精神分析という学に？ それとも、そうさせる他の何かがあるのだろうか。そして、精神分析はフロイトの名をこれからも必要とし続けるのだろうか。これが本論の主要な問いである。

2 原生動物の偽足

まずわたしたちは、『ナルシシズム入門』^[1]で描かれている、ある比喩的形象から始めてみたい。精神病的な精神分析的理解に腐心したフロイトは、『ナルシシズム入門』で対象リビドーと自我(ナルシシズム)リビドーとの区別を導入し、リビドーの二つの系列を提唱する。すなわち、自我に備給されたリビドーが外界の対象へ向かう場合は対象リビドーと呼ばれ、再び自我へ備給されるリビドーが自我(ナルシシズム)リビドーと呼ばれることになる。こうして、精神病は外界の対象からリビドーが完全に撤収され、現実への関心を失った状態(二次的ナルシシズム)として理解される。このリビドーの二つの系は対立関係にあり、経済論的には、「一方が余計に使われれば、他方が減ってゆく」ことになる。

「われわれはこうして自我にふりあてられた根源的なりビドーの割当という観念を形づくるのであって、その一部はのちには対象にあたえられることになるのだが、このものはしかし、根本的にみれば、いつまでもあとに残って、対象への割当に対して、あたかも原生動物とそれが送り出す偽足とのあいだのそれに似た関係にたつのである。〔…〕このようなりビドーの流出、すなわち送りだされたり、ふたたび引っこめられたりすることのできる対象への割当は、われわれだけが気づいたものだった」

自我（ナルシズム）リビドーは、「送りだされたり、引っこめられたり」しながら、最終的には自らに戻ってくるリビドーであり、それゆえ彼はこれをナルシズム的であるとしている。こうした、一周して自己（自我）へと戻ってくるというイメージは、「抑圧されたものの回帰」に代表されるように、フロイトにとって一貫して重要なモチーフである。同様のモチーフは、無意識の記憶システムに関する仮説においても、見出すことができる。

「これまで自分の胸にしまってきたこの仮説では、備給の刺激伝達が自我の内部から、完全に透過性の知覚・意識（W-Bw）システムへと、急速で定期的なインパルスとして送り出され、撤回される。このシステムがこのような方法で備給されている限り、これは意識に伴う知覚を受け取り、無意識の記憶システムに興奮を伝達する。備給

が撤回されると同時に、意識の（へ灯）が消え、このシステムの機能は停止する。無意識が、知覚・意識（W-Bw）システムを介して、外界に触手を伸ばし、外部の刺激を試食すると、急いで触手を引っこめられるかのようである。」

ところで、対象リビドーと自我（ナルシズム）リビドーのエコノミーとは「一方が余計に使われれば、他方が減ってゆく」というものであった。けれども『ナルシズム入門』に戻って他の箇所を読むと、これら二つのリビドーは単純な対立を成しているのではないことがわかる。たとえば、睡眠や病を患っているときなど、リビドーの二つの系はときに重なり合い——「リビドーと自我への関心とが、この場合は同じ運命をもち、またしても互いに分かちがたいものになっている」——、また、ときには関連なくがいに独立したものとして描かれることになる。つまり、自我（ナルシズム）リビドーを本格的に導入しようとする時、そこにアポリア的な二元論をも引き入れてしまうことになる。

ここで考えてみたいのは、精神分析にたいするフロイト自身の距離のとり方である。前の二つの引用箇所には自説に関する強い自負心が示されているが、それと同時に、そこにフロイトのためらい、とまどい、ある種の恐れを読み取ることができないだろうか。今まさに提出しようとしている見解を仄めかし一部を開陳しながら、「外部の刺激を試食すると、急いで触手を引っこめられるかのよう」な物言いなのである。

「精神分析はフロイト以来、『科学』というオブセッション

に取り憑かれた理論＝実践である」と十川が指摘するように、フロイトは精神分析がその未来において、一つの科学となると考えていた⁵⁾。ここでの科学とは、物理学を範とする実証科学である（フロイトは、将来、無意識や第二局所論における諸審級が科学的に証明されると考えていた）。しかしそれにもかかわらず、精神分析はもはや科学性とは遠く離れた形象性や虚構性——原生動物の偽足や無意識の触手——がもつ喚起方に頼らざるをえない⁶⁾。こうした揺れ動きを、フロイトのために重ね合わせることは可能だろう。彼の当惑は、第一に、科学的（経験的）なものの中に思弁が入り込んでくることへの反応として考えられる。

しかしフロイトの著作のなかには、彼のためらいやとまどいが、まるで揺れ動きそのものを欲しているかのように、繰り返し立ち現れる。たとえば、『夢判断』の有名なヘイルマの注射の夢⁷⁾で、フロイトは「夢の秘密を解き明かした」と感じながらもそこに「未知」へとつながる「夢のへそ」という理論的虚構をもち出さざるをえないし、最終の第七章の冒頭に掲げられた「子どもを亡くした父親の夢」では「夢の本音（夢思考）が明々白々に分かる実例である」としながらも、唐突に「夢を心的過程として解明することはできない」と絶望的な見解を表明している。

「われわれはこれまで歩いてきた道が滑らかな、容易な道であったことをはっきりさせておかなければならない（……）われわれがこれまで歩いてきた道は（ことごとく、

光へ、解明へ、完全な理解へと通ずる道であった。だがわれわれが夢を見るさいの心的諸過程の中へ次第に深く入って行こうとする瞬間から、すべての途は暗黒へと通ずるだろう。われわれには夢を心的過程として解明することはできないのである。なぜなら「解明する」とは、未知のものを既知のものに還元することであり（……）そういうった心理学的知識は今のところまだ存在しないからである」⁸⁾

こうしたフロイトのためらいには、科学的／非科学的といった区分の前で決めかねているというよりも、未知のものへ向かって踏み出そうとする際に人が感じる、もつと重苦しい何かがあるように思われる。

3 fort/da

フロイトは何をためらっているのだろうか。これまでの自説が新たな発見のために再考を余儀なくされることを恐れているのだろうか。だが、彼は自分の協力者を失うとしても、憑かれたように何度も自説を修正し刷新してきたのも事実である。この問いには後に立ち返るとして、つぎに彼のためらいが頂点に達する『快感原則の彼岸』（以降「彼岸」と表記）について検討してみたい。

ピーター・ゲイは『彼岸』という論文の特殊性について、「フロイトの論文は、どんなに理論的なものでも、臨床経験への言及があつて、それが読者を安心させるのだが、ここでは

それがほとんど、いやまったく見られぬ⁹」と指摘している。さらに読者の不安をかき立てるのは、フロイトが「自信のなさをいつも以上にはっきり吐露している」ことにある。彼は「死の欲動」をこの論文で初めて学術的に導入したあと、次のように自らの困惑を表明している。

「わたし自身がここに示された想定を信じているかどうか、またどの程度まで信じているかが問われることがあろう。わたしはへわたし自身はこれを信じていないし、人に信じてもらいたいと考えているわけではない」と答えるを得ない。正確には、わたしがこれをどの程度まで信じているか、自分でもよくわからないのである。〔…〕科学的な好奇心のために、あるいはあえて言えば〈悪魔の代弁人〉として、ある思考の道筋に没頭し、それに従ったとしても、悪魔に身を売るわけではないのである。」¹⁰

『彼岸』の第二章に——この論文は、不自然な七章立てになつてゐる——挿入されている有名な「いないいた遊び」は、彼の『彼岸』との戯れを描いているかのようである。ここに登場する一歳六カ月の男の子は、母親に心から懐いていたが、母親が何時間も子どもの側を離れていても、泣いたりしない、「お行儀のよい」子どもだった。子どもは、木製の糸巻きをベッドの向こうに投げ込み、糸巻きが姿を消すと「オーオーオー」と意味ありげな声をあげ、それから紐をひっぱつて糸巻きを取り出すと、「ダー（いた¹¹）」という言葉が発し

た。フロイトと子どもの母親は、「オー」という音は単なる間投詞でなく、「いない（フールト¹²）」を意味していると考えた。

「こうしてこの遊戯の意味が解明できるようになった。……子供は自分の手にすることができるかぎりのもので、母親が「いないいない」と「いた」になることを自分で演出していたのであり、これで、欲動の放棄が償われていたのである。」¹³

しかし母親が「いないいない」になるといふ子どもにとつて苦痛な体験を飽くことなく繰り返すのはどうしてだろうか。フロイトはこれに関し、受け身の体験を能動的に自ら体験しなおし、支配、克服しようとする傾向や、自分を一人に置き去りにしていく母親への復讐衝動（いなくなつちまえ）によつて説明しようとする。しかし快感原則によるこうした説明は、喜びをもたらすはずの「いた」よりも、「いないいない」という最初の場面の方がはるかに頻繁に演じられたという観察と矛盾する。

さらに興味深いことに、一人でいるとき子どもは姿見に自分の姿を映した後、しゃがみこんで自分の鏡像をみえなくするといふもう一つの遊びを編み出していた。そして母親が帰ってくると、このことを「坊や、オーオーオー！」といふ言葉で母親に報告したのである。糸巻き遊びでは、いなくなるのは糸巻きに託された母親の存在であったが、姿見の遊びでは消えるのは自身の鏡像である。

放り投げては手繰り寄せる子どもの糸巻き遊びのように、フロイトも精神分析という言葉説を、自分のもとから手放すと

同時に、再び自分へ回帰させようとしているのかもしれない。そして、姿見に映した自分の鏡像を消す子どものように、フロイトの名も精神分析という言説のうちに現れては消えていく。「いないーいた遊び」をしながら母の帰りを待つ子どもの姿に、愛娘ゾフィー（この子どもの母親）の喪失の哀しみのなかで精神分析の言説と戯れるフロイト自身の姿を重ね合わせることもできるだろう。そして、彼はとまどいのなかで執り行う「いないーいた遊び」を、密かではあるが強い快感を伴ったものとして体験していたであろう。

手放すことは、それを再び手に入れ、自己のものとして所有するためである。それは自我（ナルシシズム）リビドーが自分のもとへ戻ってくるような、ナルシシズムの円環を形づくっている。そして、子どもの遊びや心的外傷の観察から、フロイトはこれまで自らに禁じていた「思弁」の力を「悪魔の代弁人」となって存分に羽ばたかせている。しかしながら、「反復強迫」、さらに進んで「死の欲動」へと向かうこのテクストには、これまでの精神分析の成果や保身への印象的な無関心さに加えて、ナルシシズムの円環を完成させると同時にそれを破損させる特殊な力が宿っている。

「このような思弁的、構成が果たして役に立つかどうかはまだ分からない。この構成は精神分析におけるもつとも重大な表象のいくつかのものを固定化させようとする努力によって導かれてはいたが、しかし、それは精神分析を超越しすぎているのである」

4 死の無意味さ

ゲイによると、「死の欲動」という述語がフロイトの手紙に現れるのは、愛娘ゾフィー・ハルバーシュタット（「いないーいた遊び」の子どもの母親）が流感による肺炎のため急死した一週間後のことである。そして同年の一九二〇年、「死の欲動」を初めて論じた『快感原則の彼岸』が上梓される。最愛の娘——「私の大事な、花のようなゾフィー」——の死と、生命が誕生以前の無機的な状態へ帰還しようとする「死の欲動」とのつながりを、そこに感じ取ることは容易である。しかし、フロイトは「死の欲動」と娘の死とを関連づけられることに、過剰な反応をみせる。たとえば、彼は一九二〇年七月一八日、友人のアイティンゴンにたいして、ゾフィーの死よりも前に『彼岸』の原稿を見たと言明してほしいと書き送っている。また、当時この関連性を指摘したヴィッテルスにたいして、そうした見解は一見もつともらしく思われるが、明らかに間違いであると主張している（『彼岸』を書いたのは一九一九年で、そのころ娘はびんびんしていました¹⁶）。このフロイトの否認は、『彼岸』のなかのつぎの一節にも込められている。

「人は誰でも死ななければならぬし、しかも自分の死に先立って、最愛の人を失わねばならないかもしれない。それを考えると、こうした死が偶然によるもので、あるいは避けられたかもしれないと考えるよりも、過酷な自然の法則、崇高な必然性に屈したと考える方が、慰められよう。しかし、死は内的な法則性を備えたものである

という信念は、「存在の苦しみに耐える」ために、われわれが作りだした幻想の一つにすぎないのではないか。この信念は根源的なものではない¹⁷。

こうしたフロイトの態度には、何かやはり不可解なものが残されている。これは私生活に関する彼の秘密主義に単純に帰してしまえることなのだろうか。フロイトは、自らの信念と反するような、哀しみに打ちひしがれている自分の姿を公に知られることを忌避したのだろうか。そうだとしたら、こうした態度はフロイトの不誠実さとして非難されるべきだろうか。しかし、『夢判断』を俟つまでもなく、精神分析とはフロイトが自らの内面を分析することで開始されたのではなく、かつただろうか。あるいは、『彼岸』のテキストと「死の欲動」論が自分自身を超えて生き延びることができ、ことを願うがために、精神分析がフロイトの名をもはや必要としなくなる未来のために、精神分析が彼自身の個人史へ還元されてしまふのを恐れたのだろうか。

もちろん、この問いにたいして完全な回答を与えることは不可能である。だが、ここではわたしたちは、「死の欲動」が最愛の人の死と安易に結びつけ論じられることで、何か大切なものが抜け落ちてしまうことをフロイトは恐れたのだと考えてみよう。そうした観点から『彼岸』や手紙を読んでいくことで、わたしたちはある地点へと導かれていくのである。

ともかく、少なくとも『彼岸』が深い哀しみのなかで書かれたことは、疑い得ない事実である。娘の死の直後に書いた

手紙には、フロイトの心の痛みが率直に述べられている。「子どもを失うということは、ナルシシズムの重大な損傷であるような気がします。どんな哀しみにせよ、それは後から来るでしょう¹⁸」。「猛威の前に、頭を垂れるしかありません。より高い力が、無力で哀れなわれわれ人間を弄んでいるのです¹⁹」。

ナルシシズムは反復をその成立の根拠としている。なぜなら、反復なしには自己への無限の回帰や、循環的な再所有化のプロセスは生じないと考えられるからである。フロイトは『彼岸』において、反復強迫を第一に「無意識的な抑圧されたものによって生じる²⁰」と理解する。たとえ抑圧されたものの回帰が自我にとって不快であっても、それは欲動の変形された充足であり、快感原則の枠内で説明が可能である。

しかし、これまで述べたことを打ち消すかのように、フロイトは次のように述べる。「反復強迫は、快感をもたらす可能性のまったくない過去の体験を再び喚起する²¹」。こうした反復は、臨床上、経験的に転移において見出される。クライエンは苦しみしかもたらさなかった幼年期の養育者との体験を「転移において反復し、いとも巧みにへ生き直す²²」。苦痛でしかない出来事を転移において反復する強迫は、「いかなる場合にも快感原則を越えたものであることは明らかである²³」。さらにフロイトは、こうした苦痛で破滅的な反復を、いわば原初的なマゾヒズムといえるような不幸な宿命を負った人々のかにも見出している²⁴。

この第二の反復は、快感原則を超えた「デモーニッシュ」な性格をもつ。「反復強迫は快感原則を凌ぐものであり、快感

原則よりも根本的で、基本的に欲動に満ちたもの」なのである。しかし、それが単独であらわれることはほとんどない（「反復強迫の機能が、他の動機の援助なしに純粹な形で示されることはごく稀である」）。たとえば転移においても、抑圧を維持し続けようとする自我の側からの抵抗という側面が必ずあり、そうした意味では転移も快感原則に奉仕している。通常は二つの反復は絡み合い混線し合っており、明確な区別はほとんど不可能である。したがって第二の反復を考えようとするなら、「思弁」の力、つまり「魔女のメタサイコロジー」に頼らない限り、これ以上先には進むことができない。こうしてフロイトは、ためらいながらも「死の欲動」との戯れを開始する。

「生命は、発展のすべての迂回路を経ながら、生命体がつて捨て去った状態に復帰しようと努力しているに違いない。〔…〕すべて、の生命体の目標は死であると述べることができる」

「われわれに残されたのは、有機体は自らに固有の方法で死のうとするということだけである。〔…〕しかしここで立ち止まって、そのようなことがありうるかどうかを考えてみよう」

注意しなくてはならないのは、フロイトが「生命体の目標は死である」と述べる時、死にたいして何らかの価値や意義を見出そうとしているのではない、ということである。先

の引用のなかでフロイトが、「死は内的な法則性を備えたものであるという信念は、『存在の苦しみに耐える』ために、われわれが作りだした幻想の一つにすぎないのではないか」と陳述していたように、彼にとって死は無意味であり、またそうでなくてはならなかった。死とは徹底的に無意味であり、無慈悲であり、本来そこに何の慰めも見出されない純粹な暴力である。死者への呼びかけや哀願は虚空に飲み込まれてゆく。快感原則による反復がナルシズム的循環運動を開始させ完成させようとするのたいし、「死の欲動」によって駆動される反復は、ナルシズムの円環を回復不可能なほどに破壊する。

「生命体の目標は死」であり、しかもその死が無意味である以上、わたしたちの生も同様に無意味である。生とは、生の終焉を持続的に遅延させるプロセスに他ならない（「快感原則は実際には、死の欲動に奉仕するものと思われるのである」）。生のなかに死が侵入してくるのでなく、そもそものはじめから死があり、生は死の特殊なケースに過ぎないのではないか。そうだとしたら、「存在の苦しみ」を剥き出しにしようとする「死の欲動」論に、ほとんどニーチェ的ともいえるこの極端なベシミズムに、人は耐えて生き続けてゆくことが果たしてできるだろうか。

ゾフィーの死と『彼岸』にたいしてフロイトが取った態度は、「死」に関して、それによって生が意味あるものとして完結することを望むことと、あらゆる意味付けを拒否する絶対的な否定性としてとらえるという二重の態度である。フロイトはこの二つの願望の間を、へ終りなき）振り子運動のように

揺れ動いている。こうした「いないーいた遊び」、fort & daの反復、すなわちナルシズム的な再所有の動きは、彼岸と此岸とのあいだに広がる、または糸巻きの反復運動のリズムによって切り開かれる還元不可能な空間を見出すことになる。ここでは閉じることと開くことが同時に行なわれる。手から離れた糸巻きは戻ってくる。しかし、たとえ戻ってきたとしても、二度と戻ってこないかもしれないという可能性をあらかじめ完全に排除することはできない。もしも、そうした喪失の不安がまったくなかったとしたら、そもそもこの遊びは開始されることすらなかっただろう。他者へ向かって発せられる呼びかけは相手に届かないかもしれない。だが、そうであればこそわたしたちは他者へ狂おしく呼びかけ続けるのである——たとえそれが死者であるとしても。こうした呼びかけによって「いないーいた遊び」、ひいては転移が動き始めるのである。

自己（自我）の拡大を旨とするナルシズムが他者に盲目だとしても、ナルシステイックな自己中心化の運動はそうしたデモニッシュな他者の経験を一種のトラウマとして、不可避的に呼び込んでしまうのである。こうした他者の経験こそ、精神分析が新たに再発見し、再生産しようとしている力なのかもしれない。

5 ヴィルヘルム・フリースへの手紙

フロイトは、自分の個人的な生活をうかがわせるものにして、きわめて慎重に管理していた。彼は生涯のうち何度か、

日記や書簡などの私的な資料や、いくつかの論文の草稿を焼却している。もしそれらが現存していたとしたら、精神分析にかんする新たな知見のみならず、精神分析の言説が紡ぎだされていった舞台裏や、そうしたプロセスとフロイトの関係を理解する多くの手がかりが得られたであろう。彼は一八八五年四月二八日の婚約者マルタ・ベルナイスへの手紙に、つぎのように書いている。「ぼくは一四歳以来の日記全部と、手紙、そして論文のための抜書と草稿とを廃棄した。手紙のうちでは家族のものだけがこの運命を免かれた。君の手紙は、マルタ、もちろん全く危険から守られている。昔からのいろいろな友情や関係がその時もう一度ぼくの眼前に姿を現わし、沈黙のうちに死の一撃を蒙ったのである。〔……〕伝記作家たちを苦しめてやろう、そう簡単にやってもらおうわけにはいかない。伝記作家の一人一人がそれぞれ「主人公の発展」に関する見解を出し、しかもそのいずれもが正しいということになるのだ。ぼくは彼らがどんな思い違いをやらかすか今から楽しみにしている」⁽²³⁾。

しかし、フロイトが廃棄したり忘れてしまった書簡や草稿の一部が、フロイトの検閲や記憶を超えて生き残り、彼の死後に次々と公表されることになった。なかでも一九八五年のいわゆる「マッソン事件」では、現存する全ての「フリースへの手紙」——フロイトがもっとも隠しておきたかったものの一つに違いない——が、フロイトの死から約半世紀を経て公開されることとなった。周知のように、ヴィルヘルム・フリース（一八五八—一九二八）はベルリンの耳鼻科医で、精神分

析の創生に深く関わった人物である。フロイトは、ほとんど同性愛的ともいえる親密な友情関係のなかで、「自分たちの私生活や家庭生活の細部について、異常なほど喜んで情報を交換」している。フロースとの交友は、もっぱら手紙を通して行なわれた。文通は一八八七年に始まり、最終的に二人の関係が破綻する一九〇四年まで続いた。

一九二八年一月二月、フロースの死の約二ヵ月後に、彼の妻イーダ・フロースはフロイトに手紙を書き送っている。その内容は、夫がフロイトに宛てて書いた手紙を彼が今も所有しているのなら、自分に渡してほしいというものであった。この手紙にたいしフロイトは、フロースからの手紙の一部は破棄したが、探せばいくつも見つかるとも書き送っている。しかしその約三週間後には、フロースからの手紙は残っていない、と未亡人に知らせている。

その後、イーダ・フロースは自分の手元にあつたフロイトから夫への手紙二八四通と草稿を、シユタールというベルリンの作家兼美術商の人物に売り渡すことになる。彼女は売却の際、フロイトに転売しないという条件をつけていた。シユタールはナチスが政権を取ったためパリに逃れ、そこでマリ・ボナバルトにこの手紙と草稿の話を持ちかけ、ボナバルトが買い取ることとなった。

マリ・ボナバルトはナポレオンの弟リシユアンの曾孫で、ギリシャ国王の妻であり、デンマーク王室の一人でもあつて、晩年のフロイトのロンドンへの亡命を演出した人物である。彼女は、一九三六年一月二月にフロイトに手紙を書き

——イーダ・フロースの手紙から七年、ヴィルヘルム・フロースとの文通から四〇年以上経っている——、フロースへ宛てたフロイトの手紙と草稿が現存し、それをボナバルトが所有していることを知らせる。フロイトは驚愕し、未亡人の自分にたいする仕返しと感じ、自分が出費の半分を負担するからそれらの手紙を自分に返してほしいとボナバルトに申し出る。「われわれの文通はあなたが考えることのできる最も親密なものでした。それが見知らぬ人の手に入っていたなら、きわめて苦痛だったことでしょう〔……〕私はそのうちの何も、いわゆる後世の人びとには知られたくないのです〔……〕」（一九三七年一月三日）。フロースへの手紙は、忘れた頃に亡霊のようにフロイトを襲い、彼を強い不安に陥れたのである。

ボナバルトは、しかしながら、精神分析にとつて重要なこれらの資料がフロイトの手に渡ると破棄されてしまうに違いないと考え、彼女は自分の分析家でもあり師でもあるフロイトの再三の要求を聞き入れようとしなかつた。「もし、私の予感が正しければ、これらの手紙のなかにある若干の個人的な発言のために全部の資料が破棄されるなら、精神分析の、この比類ない新しい科学の、プラトン自身の思想よりも重要なあなたの創造物の歴史から、何かが失われてしまうでしょう！」（一九三四年一月七日）。

その後、ボナバルトは一九三七年から一九三八年にかけて書簡と草稿をウィーンのロスチャイルド銀行に預けるが、ヒトラーのオーストリア侵攻のため、ユダヤ系の銀行は差し押さえられることとなる。ボナバルトは急いでパリからウィー

ンへ向かう。彼女はギリシヤとデンマークの王室関係者であったため、ゲシュタポの面前で貸金庫の中身を取り出すことを許された。すでにその頃には、フロイトの著作はユダヤ人の学問として発禁処分とされていたため、この書簡と草稿がこのときにゲシュタポの目にとまったり、あるいはそれ以前に発見されていたなら、確実に破壊されていたところであった。それからこれらをボナパルトはパリのデンマーク公使館に預け、一九四〇年のドイツ軍のパリ侵攻の際にも、幸運な偶然のため難を逃れることができた。そして、手紙と草稿はUボートに撃沈された場合を想定して防水性の浮力のある素材で梱包され、ロンドンへ送られた。

これらの手紙は、アンナ・フロイトとエルンスト・クリスの検閲を経て、一九五〇年に出版された。しかし日の目をみたのは二八四通のうち一六八通であり、さらに掲載された手紙にしても、個人的な秘密保持に関わるという理由で、多くの箇所が削除ないし省略されていた。

その後、「マッソン事件」³⁶⁾が起る。ジェフリー・マッソンは、ロンドンのフロイト家（フロイト博物館）の管理者として、アンナ・フロイトの外出中に保管庫にあるフロイトの手紙をのぞき見たり、メモを取ったりしていた。そして、アンナの強い反対にも関わらず、現存するフリースへの手紙のすべてを一九八五年に公刊することになる（アンナは一九八二年に亡くなっている）。

フロイト自身は一九三九年九月に上顎の癌のためこの世を去った。だが、彼が「最期まで自分の人生を自分の手で操作

した」³⁸⁾のと対照的に、彼の手紙は彼の手を離れ、独自の運命を辿ることとなった。もはやとつくに失われたと思っていた、あるいはそれがかつて存在していたことすら忘却していたときに、不意打ちのように、何度も手紙が舞い戻ってきて、彼に衝撃を与え続けた。あたかも手紙が自らの存在を主張し、わたしたちについて考えよと要求しているかのように、手放したはずのもの、抑圧されたものが回帰してくる。しかも一度手から放れた手紙は、戻ってくるとしても本来の所有者の手の中に戻ってくるとは限らない。

フロイトにとってフリースへの手紙は、自己から自己への送付のようであり、決して自分から離れることがないと同時に、完全に自分に到達することも決してない。これら手紙とは、手放したものについての、それらが戻ってくることに戻ってこないことについての——すなわちなルシズム、反復、および転移に通低しているある資質に関する——二重のメタファーなのである。

6 手紙 [letter] の分割可能性

さらに〈手紙〉について検討を進めるために、つぎにジャック・ラカンの「盗まれた手紙のセミネール」³⁹⁾をみてゆきたい。「盗まれた手紙のセミネール」(Ensis 所収)は『快感原則の彼岸』で示された「死の欲動」に代表される問題系を引き受け、とりわけ「反復強迫」をシニフィアンの論理の中で探求している。

エドガー・アラン・ポーによる『盗まれた手紙』では、手

紙は、王妃、D—大臣、デュバン、G—警視總監の手を渡りながら、最後はデュバンの活躍により王妃のもとへ戻る。物語の中で手紙^⑩シニフィアンの差出人についてはおろか、そこに何が書かれているのか、読者に知らされることはない。ただ、その内容が王に知られると王妃の名誉と安全が危険に晒されるかもしれないことが告げられるだけである。「われわれの寓話は、彼ら〔主体〕の登場及び役割を統治するのは手紙であり、その迂回であるということを示すべくできている。手紙が受取人不明〔en souffrance〕の状態にある、ということとで苦しむ〔en souffrance〕のは彼らなのだ。手紙の影の下を通ることで、彼らは手紙の反映と化してしまう。手紙を手に入れる〔tomber en possession de la lettre^⑪〕手紙の所有に帰する——言語の見事な曖昧さというべきだが——とき、彼らを所有するのは手紙の意味なのである」。つまり手紙は、王によって表象され体現されるファルスの法——これは王妃が管理し、王と共有すべきものである——を脅かすものであり、それゆえ、D—大臣に盗まれた手紙は何としても、本来の場所（王妃の位置）へと取り返されなくてはならない。

「この手紙こそ、表題が示しているように、この短編の真の主題^⑫ 主体〔sujet〕なのだ。——それが迂回を蒙る以上、つまり手紙はそれに固有の行程をもっているということなのだ。この特徴において、手紙のシニフィアンとしての効力が確認される」。手紙はそれ自身の「固有の行程」をもち、本来の場へと回帰する。手紙を持ち去ったD—大臣を訪問したデュバンは、D—大臣が目を離れたわずかの隙に当の手紙を手に入

れ——彼は、あらかじめ準備しておいた身代わりの手紙をそこに残しておく——、手紙は無事に王妃のもとへ帰ってくる。「盗まれた手紙」さらには「受取人不明の手紙が意味するところは、手紙はつねに宛先に届くということである」^⑬。

シニフィアン、とりわけシニフィアンの「法の場所」としてのファルスは、『盗まれた手紙』と同様、「固有の行程」をもち、本来の場としての宛先〔destination〕（かつ出発点）へと循環的に回帰する運命〔destin〕にある（受取人不明の手紙が意味するところは、手紙はつねに宛先に届くということである）。それゆえ、この反復構造が保障されるためには、手紙^⑭シニフィアンは常に「今あるところの手紙であり続け」なくてはならず、その行程の途上で分断されたり、失われたりして、宛先へ届かないなどという事態は決して起こってはならない。「われわれが強調したのがまずなによりもシニフィアンの物質性〔matérialité〕であるとすれば、この物質性は多くの点で特異であり、その特異な点の第一は、まったく部分分けに耐えないことである。一通の手紙を細かくちぎってみたまえ、それは今あるところの手紙であり続けるだろう」^⑮。手紙^⑯シニフィアンの分割、散逸、忘却の可能性は初めから剥奪されているのである。

ジャック・デリダは「真実の配達人」〔La Carte Postale 所収〕において、こうしたシニフィアンの分割不可能性の論理に宿る、ア・プリオリな理念性、念性を指摘する。「シニフィアンの物質性」、すなわちその分割不可能な特殊性についての言表が打ちたてられるのは、このようなあり得べき喪失に抗してのこ

とである。どこにも見出すことのできない、分割不可能性から演繹されたこの「物質性」は、実際には一個の理念化に対応するものである。一個の字面＝手紙 [lettre] の理念性だけが、破壊的な分割に抵抗する⁴³⁾。シニフィアンの分割不可能性は、円環的な回帰の法として、手紙をつねに宛先（出発点でもあり目的地でもある）へと送り届ける——「手紙はつねに宛先に届く」。

これにたいして、デリダは手紙（シニフィアン）を、文字通り [à la lettre / to the letter] 細かくちぎってしまおう。手紙の分割可能性 [La divisibilité de la lettre] は、反復強迫の円環的回帰のシステムを攪乱することになる⁴⁴⁾。

「手紙 [lettre 文字] は必ずしも常に宛先に届くわけではなく、そしてそのことが手紙 [文字] の構造に属している以上、それが真に宛先に届くことは決してなく、届くときも、〈届かないこともあり得る〉というその性質が、それを一個の内的な漂流で悩ませている [tourmenter] と言い得るのである。

手紙 [文字] の分割可能性はまた、それが場を与える [機縁となる] シニフィアンの分割可能性であり、したがってそれに従属 [assujettis]、それを「代理＝表象する」諸々の「主体 [sujets]」、「登場人物」、「位置」の分割可能性である」。

ラカンのシニフィアンの論理における反復強迫とは、十川

が指摘するように「出来事、反復可能性というアポリアを問うのではなく、科学化の可能性としての反復を問題にしているにすぎない⁴⁵⁾。それゆえ、ラカンにおいては反復強迫を前にしたフロイトのためらい——すでに見てきたように、それは思弁に頼ることへのためらい、死者への呼びかけのためらい、「悪魔の代弁人」となることへのためらいでもあった——が捨象されてしまおう。「セミネール」は容赦なくこの分身と不気味であること [Unheimlichkeit] の問題系を排除する⁴⁶⁾。デュパンが身代わりの手紙——ラカンはこのもう一つの手紙について言及していない——をD—大臣のもとに残すように、「手紙はつねに宛先に届く」と見せかけながら、手紙は自らの分身、複製、コピーを作り続け、自らのうちに目的地なき漂流を刻印してゆく。「……」手紙 [文字] を回帰させるのは、もう一通の手紙を道に迷わせるためにほかならない⁴⁷⁾。

7 「フロイトへの回帰」という出来事

精神分析は、神経症治療の、心的変容の、人間理解についてのいわば実践的・理論的な道具であるが、それがなぜ創始者フロイトの名と不可分に結びついているのかという当初の問いに、わたしたちは再び戻ってきた。もちろん、ここで問題となっている「フロイト」は、フロイトその人ではない。フロイトの名によってわたしたちに届けられている「フロイト」である。それゆえ、手紙と同様に名前も亡霊的である。

ここで言う亡霊的とは、ナルシズムの円環に収まらないもののことである。手紙も名前も構造的な分割可能性のため

宛先に必ず届くとは限らず、届いたとしても「届かないこともあり得る」というその性質が、それを一個の内的な漂流で悩ませている」。そして、手紙も名前も主人（主体）の死後も残り続けることが可能であり、さらに無限の複製（読解）が可能である（したがって、誤読、誤解、歪曲の可能性に晒されている）。おそらく、フロイトへの回帰とは、もはや真のフロイト、すなわち同定可能な確固としたフロイトやフロイトの真の意図といったものへの回帰ではない。それは複数のフロイト、そのどれもが本物であると同時にコピーであり、その始まりからコピーであり続けるようなフロイトへの回帰となるだろう。「伝記作家の一人一人がそれぞれ「主人公（フロイト）の発展」に関する見解を出し、しかもそのいずれもが正しいということになるのだ」。フロイトの遺産の正当な継承者（管理者）は、もはやここにはいない。

精神分析とは、その通りに行なえば予測された変化があらわれるといった純粹なプログラムや予定調和的なプロセスではない。つまり、それは一種の道具であるにも関わらず、わたしたちもその道具の一部であることをあらかじめ要求されている。フロイトの名が精神分析に先立つと同時に精神分析のうちにあるように、それはわたしたちにもそこに参入するよう呼びかけている。誤解をおそれずに言うなら、フロイトへの転移のなかでしか精神分析は行なわれることはないだろう。本論文の冒頭に掲げたサミュエル・ベケットの一節のように、それは「名づけえぬもの」の経験である。扉を開けてフロイトはわたしたちを招き入れる。扉の向こうにはフロイ

トがいる。扉の向こうにはフロイトはいない。そしてこの「いない——いた遊び」は（終りなき）ものとならざるを得ない。フロイトという一回限りの出来事が、彼のためらいが、現在の日々の臨床場面において反復されている。それは反復（多くは転移）を前にしたフロイトのためらいの反復である。ただし、フロイトの名がフロイトそのものではないように、臨床場面でわたしたちが感じる様々なとまどいやためらいは、フロイトの反復でありながら、フロイトのそれとまったく同一ではない。反復は差異を含んだ反復、他者性へと引きさらってゆく反復であり、それゆえに変化への可能性が開けるのである。かりに、転移におけるセラピストとの関係が過去の完全な再演だとしたら、転移が何らかの治療的变化を惹き起すことはないだろう。

それでは、わたしたちはフロイトのためらいについて、どのような場所から語ることができるのだろうか。そして、そもそも筆者——この論文の筆者であるわたし——は、どのような場所からフロイトについて書いているのか。おそらくこの論文は、フロイトのためらいと、フロイトの名を冠したテキストと、フロイトについて書かれた諸テキストを反復しているに過ぎないのだが、これらのテキスト群を通して——それを読むこと、それについて書くことよって——複数のフロイトと複数の精神分析とともに、わたしたちは——わたしからわたしたちへ、さらにはへ複数のわたしたちへ——否応なく分割されてゆくのである。

わたしたちはフロイトのためらいを語るために、おそらく

はフロイトのためらいを反復することから始めなくてはならない（精神分析の言説で「いないーいた遊び」をするフロイトを追ってきたわたしたちは、わたしたち自身が「フロイト」の名で「いないーいた遊び」を執り行っているのだ。それはこれまで述べてきた「わたしたち」が解体し始めるような場所を目指すことなのかもしれない。フロイトへの転移のなかでしか精神分析は行なわれないと先に述べたが、これは言い方を換えると、精神分析はある局面においては死の恐怖（あるいは不気味なものを経験）のなかでしか行なうことができない、ということになるだろう。

註

- (1) Freud, S., Zur Einführung des Narzissmus, 1914. フロイト「ナルシズム入門」『フロイト著作集5』懸田克躬・吉村博次訳、人文書院、一九六九年、一〇九―一二三頁。
- (2) フロイト「ナルシズム入門」邦訳、一一一頁（太字による強調は引用者。以下同様）。
- (3) Freud, S., Notiz über den "Wunderblock", 1925. フロイト「マジック・メモについてのノート」『自我論集』中山元訳、筑摩書房、一九九六年、三〇三―三一二頁（引用箇所は三一―三二頁）。
- (4) フロイト「ナルシズム入門」邦訳、一一七頁。
- (5) 十川幸司『精神分析への抵抗——ジャック・ラカンの経験と論理——』青土社、二〇〇〇年。

(6) 「死の欲動」について思索する際にも、フロイトは生物学を参照している。「生物学に依拠しなければならなかったために、われわれの思弁の不確実性が著しく高まっていることは明らかであろう」(Freud, S., *Sensetis des Lustprinzips*, 1920. 「快感原則の彼岸」『自我論集』中山元訳、筑摩書房、一九九六年、一一三―二〇〇頁、引用箇所は一九四―一九五頁)。

(7) Freud, S., *Traumdeutung*, 1900. フロイト「夢判断」『フロイト著作集2』高橋義孝訳、人文書院、一九六八年、九六頁。

(8) フロイト「夢判断」邦訳、四二〇頁。

(9) Gay, P., *FREUD: A Life for Our Time*, W. W. Norton & Company, 1988. ユーター・ゲイ『フロイト2』鈴木晶訳、みすず書房、二〇〇四年、四六二―四六三頁。

(10) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一九二―一九三頁。

(11) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一二七頁。

(12) フロイトはフェレンツイへの一九一九年の手紙のなかで『彼岸』について触れ、この論文を「心から楽しんでいる」と書き記している(ゲイ、前掲邦訳、四六三頁)。

(13) 「私のごく近年の業績」(「快感原則の彼岸」、『集団心理学と自我の分析』、『自我とエス』)の中で私は、いままではおさえていた思弁への傾向を思うままに働かせてみた。〔…〕私は自己保存と種別保存とをエロスの概念のもとに総括し、それにたいして、音もなく働いている死の欲動あるいは破壊の

欲、動を対比させたのである」(Freud, S., Selbstdarstellung, 1925. フロイト「自己を語る」『フロイト著作集4』懸田克躬訳、人文書院、一九七〇年、四二二・四七六頁、引用箇所は四六五頁)。

(14) フロイト「自己を語る」邦訳、四六五・四六六頁。

(15) ゲイ、前掲邦訳、四五九頁。

(16) この手紙は現存していない。ヴァイツテルス著『フロイト』の余白にフロイトからの手紙が(おそらくヴァイツテルス自身によって)転記してあり、それがゲイの著作に引用されている(ゲイ、前掲邦訳、四五九頁)。

(17) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一七〇・一七一頁。

(18) オスカール・プフィスター宛(一九二〇年一月二七日) Freud, S., *Briefe 1873 - 1939*, herausg. von Ernst (und Lucie) Freud, 1960. 『書簡集』『フロイト著作集8』生松敬三他訳、人文書院、一九七四年、三三三六頁。

(19) マックス・ハルバーシュタット宛(一九二〇年一月二五日) フロイト「書簡集」邦訳、三三四頁。

(20) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一三四頁。

(21) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一三五・一三六頁。

(22) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一三七頁。

(23) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一五九頁。

(24) フロイトはタッソーの叙事詩『解放されたエルサレム』を引き合いにだす(「快感原則の彼岸」邦訳、一三九頁)。主人公のタンクレートは、恋人のクロダリーンが敵方の騎士の甲冑を身にまとっていったため、恋人と知らずに殺してしまふ。タンクレートは恋人を埋葬した後、不気味な魔の森に入つてゆく。彼は森の中で一本の樹に刀で斬りかかるが、この樹には死んだクロダリーンの魂が呪縛されていた。樹から血が流れ、クロダリーンは、「またもや愛する人に傷つけられた」と嘆くのである。

(25) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一四〇頁。

(26) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一三九頁。

(27) Freud, S., *Die endliche und die unendliche Analyse*, 1937. 「終りある分析と終りなき分析」『フロイト著作集6』馬場謙一訳、人文書院、一九七〇年、三七七・四一三頁、引用箇所は三八五頁。

(28) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一六二頁。

(29) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一六三・一六四頁。

(30) 早すぎたゾフィーの死について、「心のずっと奥底では、私は深い、忘れることのできないナルシズム的な痛手を感じています」(ザンドール・フェレンツイ宛、一九二〇年二月四日)『書簡集』邦訳、三三七頁。

(31) フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一九九頁。

(32) フロイト「書簡集」邦訳、一四八頁。

(33) 医学史家フィヒトナーの研究では、フロイトが書いた手紙の数はおよそ二万通であり、そのうちの少なくとも半数が現存してゐる (Freud, S., *The Complete Letters of Sigmund Freud to Wilhelm Fliess 1887-1904*, Edited by Jeffrey Moussaieff Masson, 1985. 『フロイトフリースへの手紙』河田晃訳、誠信書房、二〇〇一年、五四三頁「訳者あとがき」より)。

(34) フロイト『フロイトフリースへの手紙』邦訳、「序論」。

(35) たとえば、ボナパルトがこれらの手紙を整理していた一九三七年の一月に、フロイトがボナパルトに話したオオライチヨウに関する物語のことを、彼女は記している。それは、狩人がオオライチヨウを仕留めたものの、どう料理したらいいのか分からないので、一人の友人に料理の仕方を尋ねるといふものである。「その友達は彼に、羽をむしり取り、内臓を取り除き、それから地面に穴を一つ掘るように入りました。その穴にモミの枝を入れ、その上にその鳥を置き、それをもう一度枝でおおい、それから全部土をかけて埋める、と云うのです。『それから?』と狩人は尋ねました。『二週間経ったら土のなかから取り出すのだ』、『それから?』『それから捨てるのだ』(フロイト『フロイトフリースへの手紙』邦訳、「序論」)。

(36) 「マッソン事件」については、『フロイト入門』(妙木浩之、筑摩書房、二〇〇〇年)にくわし。

(37) しかし、「フリースへの手紙」のなかで間違ひなくもっとも重要だったはずの手紙が依然として行方不明である。それは、フリースの勧告によってフロイトが「夢判断」から削除したとされ、それに続く手紙で何度も言及された「失われた夢」——フロイト自身が「根底まで」分析されたと言っている一つの夢——が書かれていた手紙である(フロイト『フロイトフリースへの手紙』邦訳、「序論」)。また、一九八〇年にアンナ・フロイトは「フリースへの手紙」の原物を米国会図書館に遺贈した。そこで、それらの手紙は公開禁止となっている。

(38) 最初に病巣がみつかったのは一九二三年であり、彼はその後の一六年間に大小三三回の手術を受けている。けれども、フロイトの強靱な精神力は、鎮痛剤で頭がボンヤリするよりも、痛みのなかで物考える方を選ぶのである。そしていよいよ自分の最期を悟ったとき、フロイトは主治医のシユールに「アンナと相談してくれ。もし彼女がいいと言ったら、終わらせてくれ。」(ゲイ、前掲邦訳、七五一頁)と頼む。シユールはフロイトにモルヒネを注射し、平和な眠りについたフロイトはその二日後の一九三九年九月二三日に息を引き取った。「この老いた禁欲主義者は、最期まで自分の人生を自分の手で操作したのだった」(ゲイ、前掲邦訳、七五二頁)。

(39) Lacan, J., *Le séminaire sur «La Lettre volée»*, Écrivains, Editions du Seuil, 1966, pp.11-61.

(40) Lacan, J., *Ibid.*, p.30.

- (41) Lacan, J., *Ibid.*, p.29.
- (42) Lacan, J., *Ibid.*, p.41.
- (43) Lacan, J., *Ibid.*, p.24.
- (44) Derrida, J., LE FACTEUR DE LA VÉRITÉ, *La Carte Postale*, Flammarion, 1980, pp.439-524. 「真実の配達人」『現代思想』(デリダ読本)、清水正・豊崎光一訳、青土社、一九八二年、一八・一一三頁。
- (45) Derrida, J., *Ibid.*, p.492. 邦訳、八二頁。
- (46) デリダによるラカン読解は、ラカン理論の全体にわたるものではない。デリダが採り上げるのは、時期にするとラカンの理論システムがもつとも強大となった一九五五年頃〜六〇年代のテクスト群であり、なかでも『エクリ』において特権的な位置を占める「盗まれた手紙のセミネール」にとりわけ照準を合わせている。
- (47) Derrida, J., *Ibid.*, p.517. 邦訳、一〇五頁。
- (48) 十川、前掲書、一三五頁。
- (49) Derrida, J., *Ibid.*, p.488. 邦訳、七七頁。
- (50) Derrida, J., *Ibid.*, p.520. 邦訳、一〇八頁。
- (51) フロイト「書簡集」邦訳、一四八頁。

(52) 「分析に不慣れな人が、漠然とした不安を感じるのには、眠らせたままにしておくべきだと感じるものを目覚めさせるのを恐れるからであり、基本的にはこのデモーニッシュユな強迫が登場するのを恐れるからである」(フロイト「快感原則の彼岸」邦訳、一五九頁)。

(ながた よういち・臨床心理学／精神分析)

